



巣穴の様子を見に来た母ダヌキ

野生のいぶき
湖国のフィールドから
動物写真家 須藤一成

7



子ダヌキは恐る恐る巣穴から出て、じゃれあって遊ぶ。左端が父ダヌキ

10月 タヌキ

夫婦プラス1~2頭で子育て

大きな岩の下を巣穴としているタヌキは夫婦とプラス2頭いた。巣穴の中には生まれて数週間程度の子ダヌキがいる。入り口から出ている時間や距離が増えていく。ある日、父ダヌキが歩き出した時、1頭の子ダヌキが巣穴から出てきた。金黄黒っぽい色をした子ダヌキたちがじゃれあつたり、父ダヌキに乗り掛かつたりと慌ただしく動きまわる。巣穴から離れるのは恐ろしいらしく、すぐには戻り立たずなり。それでも口ごとに巣穴から出ている時間や距離が増えていく。ある日、父ダヌキがその後をついて行った。それを見た他の子ダヌキたちも一緒に父ダヌキの後を追った。子ダヌキは8頭もいた。巣穴を離れることは、子ダヌキたちにとってはかなりの冒険だ。恐る恐る遠出をしていくのだろう。戻ってくる姿が傑作だった。巣穴近くまで来ると急に恐怖心が湧き上がるのか、目も止まらぬほどのスピードで駆け出し、次々と巣穴へ突入していく。躊躇着いて、歩いて戻つて来る子ダヌキは1頭もない。

少し遠出をしては一目散に巣穴へ駆け込むことを繰り返しながら、子ダヌキたちも外の生活に慣れてくる。少し離れた岩の上で日なたぼっこをしているプラス1頭のところへ行って遊びだり、一緒に日なたぼっこをしたりしている。このプラス個体の役割は僕には分からなかった。ヘルパーとして子ダヌキたちの世話をしているのだ推測しているが、ひょっとして、ただの居候なのだろうか?

タヌキとの付き合いを深めると、そのうちにプラス個体の役割が見えてくるに違いない。野生動物の行動を理解するのは簡単ではないが、知り尽くすことができないから面白い。明日も新しい発見が待っている。

タヌキの巣穴の近くで撮影している時のこだ。1頭が左へ歩いて行った直後に、右側の岩の上に別の1頭が座っているのを見つけた。さうに僕の後ろを歩いているのがいる。そしてアナグマも近くをうろついている。一つの巣穴のまわりにたくさんのタヌキやアナグマがいる。そういうばたヌキは、3頭で一緒に行動しているグループを見かけることが多い。雪解けが進んだ春先に3頭で山を登っていくものや、冬に農業小屋を時的にねぐらにしている3頭。子育ての時期に巣穴のまわりで行動と共にしている3頭などいずれも夫婦プラス1頭のようであった。プラス1頭は、夫婦の兄弟あるいは昨年の子どもなのかもしれない。かしいがしく巣穴や子ダヌキの様子を見てまわっている。

大きな岩の下を巣穴としているタヌキは夫婦とプラス2頭いた。巣穴の中には生まれて数週間程度の子ダヌキがいる。入り口から出ている時間や距離が増えていく。ある日、父ダヌキが歩き出した時、1頭の子ダヌキたちがじゃれあつたり、父ダヌキに乗り掛けたりと慌ただしく動きまわる。巣穴から離れるのは恐ろしいらしく、すぐには戻り立たずなり。それでも口ごとに巣穴から出ている時間や距離が増えていく。ある日、父ダヌキがその後をついて行った。それを見た他の子ダヌキたちも一緒に父ダヌキの後を追った。子ダヌキは8頭もいた。巣穴を離れることは、子ダヌキたちにとってかなりの冒険だ。恐る恐る遠出をしていくのだろう。戻つてくる姿が傑作だった。巣穴近くまで来ると急に恐怖心が湧き上がるのか、目も止まらぬほどのスピードで駆け出し、次々と巣穴へ突入していく。躊躇着いて、歩いて戻つて来る子ダヌキは1頭もない。

少し遠出をしては一目散に巣穴へ駆け込むことを繰り返しながら、子ダヌキたちも外の生活に慣れてくる。少し離れた岩の上で日なたぼっこをしているプラス1頭のところへ行って遊びだり、一緒に日なたぼっこをしたりしている。このプラス個体の役割は僕には分からなかった。ヘルパーとして子ダヌキたちの世話をしているのだ推測しているが、ひょっとして、ただの居候なのだろうか?

タヌキとの付き合いを深めると、そのうちにプラス個体の役割が見えてくるに違いない。野生動物の行動を理解するのは簡単ではないが、知り尽くすことができないから面白い。明日も新しい発見が待っている。



早春、農作業小屋を一時的なねぐらとしている。日光浴に現れた



すどう・かずなり 1961年、京都府夜久野町(現福知山市)生まれ。イヌワシに魅せられ、滋賀を拠点に撮影に取り組む。米原市在住。写真集『Golden Eagle イヌワシ』(平凡社)など。